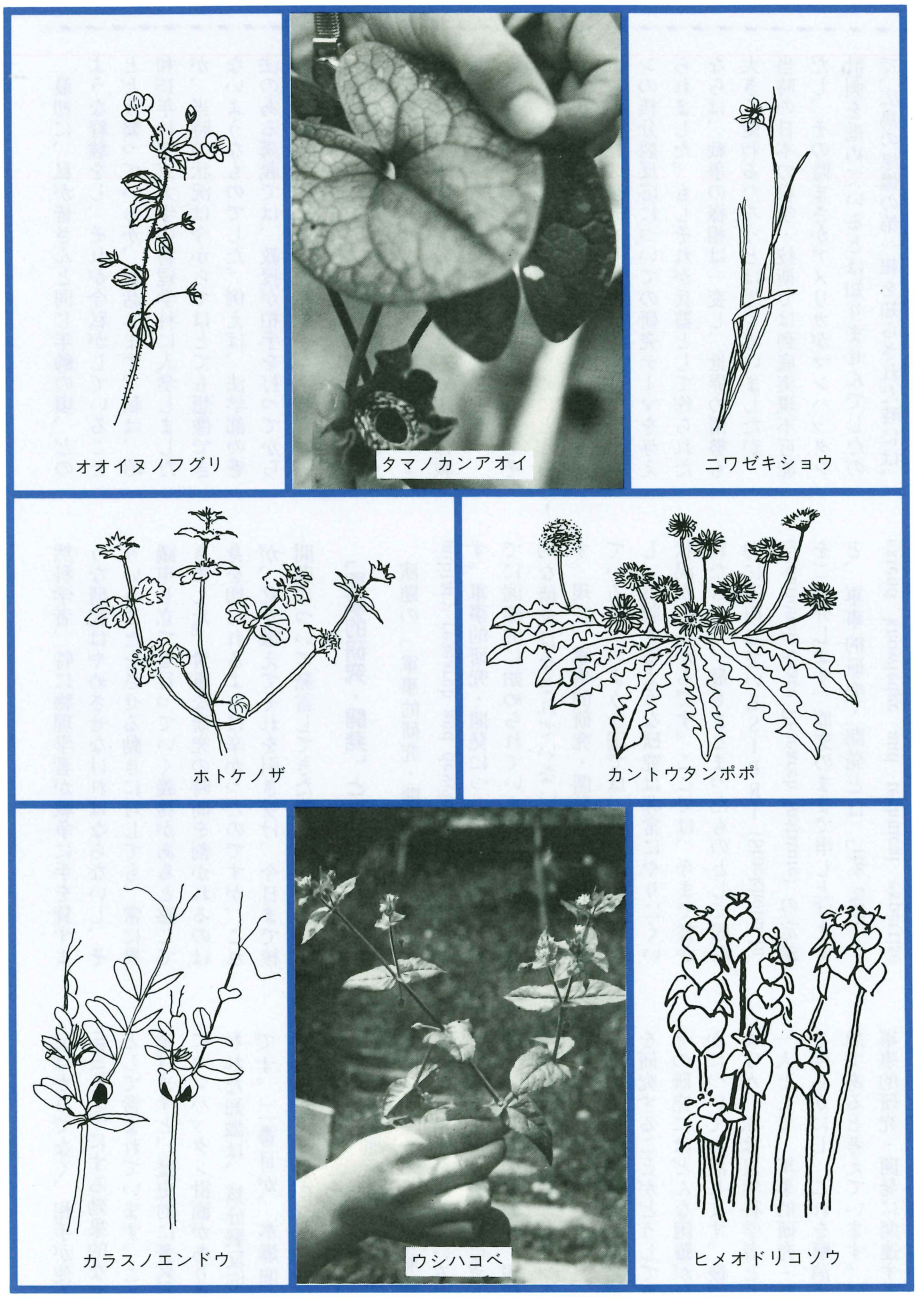
SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'87春



●平和と軍縮を求めて 人類が共に生きる条件
＝第138回大学共同セミナー＝

●東京の都市景観その2
＝第9回大学合同セミナー＝

●私の大学生活とセミナー・ハウス

Plain living and high thinking

No.106

軍事的研究・開発と科学者

明治学院国際平和研究所長　豊田　利幸

最初に、私が皆さんと同じ年齢の頃、どのような経験をし、それが今私がしていることとどう繋っているか、お話します。私は、昭和15年に東京大学の物理学科に入学しましたが、当時の状況は今からではとても想像できないようなものでした。例えば、法学部の憲法のある講義では、教授が柏手を打ってから講義を始めた。また、世に言う「平賀粛学」が行われ、当時若い人に人気のあった河合栄治郎教授が大学を辞めなければならないような事態になっていた。そして、男子には、よほど健康に障害のある人を除き、いずれは戦地に駆り出される運命が待っていました。

私が昭和18年に大学を卒業するちょうどその時、日本軍の劣勢を挽回するためにと作られた大学院特別研究生に私は好運にも選ばれ、原子核の理論をやっていた関係で、ウランの核分裂反応についての研究テーマを与えられました。もしそれが兵器として作られたならば、戦争の様相は一変し、世界の情勢も大きく変わるだろうとは思っていましたが、当時の日本の科学・技術では到底実現不可能だし、その時まさかアメリカがマンハッタン計画を進めているとは知りませんでしたので、広島の原爆の第一報を知らされた時には、大変なショックを受けました。

私は自分の生涯の友と思っていた人々をほとんど戦争で亡くしました。私が生き永らえる特別な理由はなかったはずなのに、私は今述べた偶然によって死なずにすんだ。私は自分の生涯の仕事として物理学、特に原子核素粒子の研究を選んだのですが、こういう運命を得た以上、自分の生命ある限り、二度と自然科学者、特に物理学者が戦争に手を貸すような研究はやめさせなければならないし、そういうことをさせる動きに対しても、常に異議申し立てを行っていく義務があると感じてきました。貴重な研究の時間を割かれるのは身を切られるように辛かったのですが、これが、私が敢えてそれを引き受け、今日まで核問題について発言してきた理由なのです。

「軍事的研究・開発」とは

演題の「軍事的研究・開発」は、英語のmilitary research and development の訳語です。軍事的研究・開発についての研究は、すでに国際的に始められていますが、まだ本格的な研究はなされていないように思われます。現在、軍事的研究・開発を精力的に進めている米ソのような国では、その構造を分析し、批判するような研究は非常にやりにくい状況があるからです。ここでは、今まで書かれたもので、最もまとまったものとして国際的に通用しているＳＩＰＲＩ(Stockholm International Peace Research Institute) の定義をご紹介します。原文のままで申し上げますと、軍事的研究・開発とは「the effort to extend knowledge and technical expertise wherever there are thought to be military application existing or potential in order to create more effective weapons, more effective means of using them and more effective ways of making same weapons when used by the other side ineffective」となります。

軍事は、相手があって初めて成り立つわけですから、新しい性能のよい兵器の研究・開発ばかりでなく、相手が使うであろう兵器をineffective にする効果的な方法も重要な問題として含まれています。ここで具体的な例を挙げますと、歴史的に著名なものでは、第一にマンハッタン計画があります。その時に使われた知識は、核分裂反応 (nuclear fission) です。二番目が、水爆開発プロジェクト (hydrogen project)。これは、核融合 (nuclear fusion)。三番目が、ＩＣＢＭプロジェクト（大陸間弾道ミサイル）。四番目が今問題になっているＳＤＩ(戦略防衛構想)です。ＳＤＩで本命とされているのは、核爆発を使うＸ線レーザーあるいはガンマ線レーザーです。これらはいずれも、現代物理学の知識を全面的に軍事利用することを目指しています。

次に、軍事的研究・開発の実態とその構造を研究することがどうして重要なのか、また、その研究にはどんな困難が付きまとっているかについてお話します。後でやや詳しく述べますが、私は自然科学者とくに核物理学者の一人として、軍事的研究・開発の実態と構造を明らかにし、これを解消することが焦眉の急であると考えています。研究上の困難は、軍事的研究・開発に関連する重要な事実関係のデータが、安全保障上の理由から大幅に隠されていることです。また、現在の巨大な兵器体系は非常に多くのサブシステムやコンポーネントから成り立っているため、部分システムだけを取り上げると、それらが軍事的かどうかを判断することが必ずしも容易ではないこともあります。例えば、敵の弾道ミサイルを迎撃するために不可欠な通信システム

は、それだけを取り上げると、平和利用できるシステムと区別できません。しかし、現代の軍事的な科学・技術の開発は、必ず国の予算で行われ、しかも、SDIで象徴されるように、できるだけ秘密は守りたいにもかかわらず、今や外国からの協力を得なければならないような状況になってきていることを、ここで注意しておきたいと思います。

しばしば、科学・技術は両刃の剣だと言われますが、一体、科学や技術はもともと軍事的研究に通じる性格を持っているのでしょうか。私は、核物理学が本来的に破壊的手段の開発を指向する性質を持っていると思っています。人間は誰でも物質の究極的な構造を知りたいという欲求を持っていますが、われわれの周りの物質がどういうものでできているかを調べるためには、細かく分割してゆかなければなりません。物質を分割して、人間はこれ以上分割できないものとしてのアトム（原子）という考え方に達しましたが、これもより強力な破壊手段を持てば分割し得るわけで、現に物理学はその方向で急速に進んで来ました。人間は、今では原子だけでなく、その中心にある原子核までもバラバラに破壊することができるのです。真理の研究としての自然科学自体はよいものであり、困るのはそれが悪用された場合であると普通は考えられがちですが、このように自然科学、特に物理学には、本来破壊への衝動が、内在的に奥深く潜んでいることを知っておく必要があると思います。

軍事戦略はどのようにして生まれてきたか

次に、軍事戦略や軍事教義（miliary strategy, military doctrine）の問題があります。戦後の核戦略がいろいろな形で議論されていますが、一般には戦略的な考察から軍事的研究・開発が行われると思われがちです。つまり、軍事的な観点からある兵器体系が必要だから、自然科学者や技術者によってそれが研究・開発されるとみられがちです。しかし、歴史的に言えば、まず初めに軍事的研究・開発があって、そこで開発された兵器の所有や配備を具体化し、正当化するために後から軍事的戦略やドクトリンが編み出されてきました。核抑止の教義から核爆発研究の必要性が出てきたのではなく、核爆発が技術的に可能になったから、核抑止の考えが生れた。同様に、都市を人質にして戦争を抑止するという対都市核戦略（counter city nuclear strategy）や相手方の軍事基地を直接攻撃する対兵力核戦略（counter force nuclear strategy）も、前者は水爆が技術的に完成し、後者はミサイルの命中精度が格段に向上したから考え出されたのです。また、最近では、相互確証破壊＝MAD（mutual assured distruction）と呼ばれるものがありますが、これはミサイルに複数の核弾頭を付け、それぞれ独立に与えられた指示通りに、それまでとは比較にならぬ精度で目標を破壊できる技術が開発されることによって出てきたのです。軍事的研究・開発の息の根を止めないことには、次々に核戦略が名前を変え、姿を変えて出て来ることは、以上の例から理解していただけたでしょう。

なぜ、市民の責任なのか

それでは、この軍事的研究・開発をなくす具体案はあるのでしょうか。研究費が実に潤沢で、SIPRIの最近の調査では、全世界の物理学の教育・訓練を受けた人たちの実に四分の一以上がこの軍事的研究・開発に従事している。このような現状では、彼らの自覚を促す方法に頼るのはほとんど意味がないと言わざるを得ません。

しかし、軍事的研究・開発の研究費は、どの国でも例外なしに国費、すなわち納税者のお金から出ています。ここで初めて、軍事的研究・開発と一般市民との関わり合いが出て来るのです。国費を使うということは、結局は世論の力が決定的なものであることを裏書していることに他なりません。少数の科学・技術の専門家や政策決定者に任せておいたのでは、この軍事的研究・開発をなくすどころか、その逆の方向に傾斜していくばかりです。

私は、心底から今回のSDIへの参加決定が、日本を取り返しのつかない所へ導くであろうという思いを禁じ得ません。社会や国家の将来に致命的な影響を与えるかも知れないような選択に迫られている時には、やはり一人一人の市民がそれに責任を感じなければならないと、私は思います。国によっては、言論の自由が恐ろしいくらい押えられているところがありますが、幸いにして他の国に比べて日本には今のところ相対的にかなりの自由があります。そういうことを考えると、私たちには非常に大きな責任と義務が課せられているのではないでしょうか。**（文責・編集者）**

第138回 大学共同セミナー

平和と軍縮を求めて
―人類が共に生きる条件―

＝主題＝

期日
'86.12.5～7

▼全体講義
軍事的研究・開発と科学者
明治学院国際平和研究所長　豊田利幸氏

▼ゲスト講演
地球文明時代の到来
三菱総合研究所取締役相談役　中島正樹氏

▼セクション演習
A　西ヨーロッパにおける反核運動と平和
中央大学法学部教授　高柳先男氏
B　大学生のための平和デッサン教室
東北大学法学部助教授　大西　仁氏
C　ソ連社会の改革と国際政治
成蹊大学法学部教授　下斗米伸夫氏
D　同盟と脱同盟――ニュージーランドと日本を考える――
国際基督教大学教養学部助教授　最上敏樹氏
E　米ソの核軍拡競争とSDI
――軍備管理と軍縮の問題点――
早稲田大学政治経済学部教授　鴨　武彦氏

▼運営委員
同　鴨　武彦氏

▼参加者84名（内女子30名）
早稲田（24）、筑波・成蹊（各7）、東京外国語・中央・津田塾・明治学院（各5）、国際基督教（4）、横浜国立・日本・駒沢・帝京・東京国際（各2）、東京・一橋・横浜市立・慶応義塾・東海・青山学院・法政・立教・武蔵工業・独協・学習院・成蹊短期（各1）、以上25校。

◇

昨秋、レイキャビックで行われた米ソ首脳会談は、平和を求める世界の人々の切実な希望にもかかわらず、核軍拡競争に歯止めをかける第一歩とはならなかった。核抑止という「恐怖の均衡」にかわる平和の構想は理想論でしかないのだろうか。

戦後四〇年、日本は戦争に巻き込まれず経済的繁栄を手に入れることができたが、決して世界は平和になったとはいえない。平和への切実な思いが風化するなかで、私たちは日本だけの平和に甘んじることなく、世界平和への道を模索することが望まれている。今回のセミナーの目的は、平和の問題を人類史のなかで、そして草の根の視点から考えることである。全体講義の豊田利幸氏、ゲスト講演の中島正樹氏はじめ、セクション演習の高柳先男・大西仁・下斗米伸夫・最上敏樹の四氏、そしてセミナーの運営に当られた鴨武彦氏に改めて感謝の意を表したい。

◇

セミナーは、具体的な平和構想を経済人の立場から推進しておられる中島氏のゲスト講演からはじめられた。「日本は世界史上三番目の黒字大国になった。〝ノーブレス・オブリージ〟、つまり高い地位についた者には責任が伴う。これからは経済大国に相応しい、世界に対する貢献のあり方を新しいビジョンをもって考えていくことが大切だ。もはや自国だけの利益を追求することは許されないだろう。

現代世界で軍縮が実現できないのは、兵器産業にかわる大きな景気浮揚策がないためである。第三世界を中心として、幾つかの国にまたがる地球規模のスーパー・プロジェクトを実現するために必要な資金をプールする制度（GIF）に参加し、軍拡にかわる平和プロジェクトを建設して行かなければならない」と氏は人生観を交えながら熱弁を振るわれた。

講演後の質疑のなかで、日本の軍事力について質問した学生に対して「日本は軍事費を一％枠にとどめてきたことによって、今日の繁栄を築き上げることができたということを率直に認め、今後も、オーバー・アーマメントを慎んでいくことが大切だ。しかし、身を守ることは人間として当然の本能なので、〝殴られたときに抵抗できるだけ〟の軍備を保つことも必要だ」と中島氏は主張され、一つの重要な論点を提起された。

（左から）シンポジウムの高柳，鴨，下斗米の諸氏

◇

第二日午後、豊田氏の全体講義（2～3ページに概要を別掲）と各講師を中心にシンポジウムが行われた。

まず、各講師から平和研究に携わることになったきっかけが披瀝された。

最上氏は「国際法というのは、そもそも世界平和をどう達成するかという学問であるべきなのに、そうした実感が持てなかったが、自分に子供ができたとき、平和問題が本当の意味で自分自身の問題としてみえてきた」という。鴨氏は「〝戦

争は組織的な暴力だ〟というラパポート教授の言葉が、なぜ人間は戦争をするのかという問題に悩んでいた私に一つの解答を与えてくれた」と述懐された。

続いて、参加者を交え、おもに軍事力の問題をめぐって議論が展開された。「ごく普通に暮らしている私たちも感性では平和に関心を示すが、それが社会的・実践的なレベルにまで結び付いていかないのは何故だろうか」という疑問が市民運動をしている参加者から出された。「平和について語ることがマイノリティーになってしまい、平和問題は平和研究者に任せておけばよい。自分たちがそんなことをするのは損だという考え方が蔓延している。私たちは物質的な豊かさのなかに埋没し、現状とは違う社会のあり方や生き方があるのではないかということを考えられなくなっているからではないか」と大西氏は指摘する。

また、「〟殴ったら殴りかえす〟という発想は、かえって戦争を誘発するものではないか」と、力の均衡による安全保障のあり方を疑問視する意見が出され、これをめぐって討論が展開した。

力による均衡という考え方は、詰将棋のようなもので、陣とり合戦になる。「核抑止は自動制御だと思われているが、その保証は突き詰めていけばないだろう。「一国の安全保障ではなく、国境を超える安全保障の玄関をどこまで広げていけるかが今後の課題ではないか」と鴨氏は主張された。

さらに、高柳氏は現代の軍事力というものが「私たちの生命・財産を本当に守ってくれるものではなく、国家の秩序維持機能を担っている」という。軍事力の問題は国家間、国家内部の権力装置、それから各国が置かれた地理的・歴史的状況によってその機能が異なる。日本の場合、「いったい誰が殴りかかってくるのか。日本の軍隊が他国に侵略戦争をしたことはあるが、日本が他国の軍隊によって押し入られて武力で抵抗したという歴史はない」のではないかという。このシンポジウムで出された「平和と軍備」をめぐる問題は、夕食後のセクション演習に持ち越された。

◇

最終日は、各セクションでの演習の報告と総括討論が学生司会者により行われた。報告の内容は省略し、ここでは参加者の肉声の紹介にとどめよう。

▼共感なき学問は真の学問ではないのではないか▼（平和問題は）学問上の話としてではなく、一人の人間という立場から話していくことが大切だ▼SDIについて考えることは、戦略上の技術論にすぎないように見えるかも知れないが、その背景にある論理の脆弱性を明らかにし、絶対平和を確立する考え方を探すことが本来の課題だ▼平和問題をもっと身近な日常生活のなかで話し合えないだろうか。誰だって殺されたくないと思っているし、死にたくないという感情を持っているはずだ▼諸外国から見れば、日本の被爆体験も自業自得としか見られない。自分自身に対する厳しい反省の目を持たずに、身近なところで考えるというのは物事をかえって隠蔽する結果にしかならないのではないか▼アメリカ人もフィリピン人も日本人も同じ運命共同体のなかにいる。日本がこれから世界のなかでどうやって運命共同体を作り上げていくか、一人ひとりが考えていかなければならない時がきたのではないか▼〟学はひとつ〟という豊田先生の言葉を思い出した。平和を考えていく場合、いろいろな考え方がある。私たちは、そこで各人の内に籠るのではなくて、分野の違う人たちと接触して平和を進めていくための接点を求めていく心構えが必要なのではないか。

◇

総括討論の後、講師から大要次のようなコメントが述べられた。

▼大西氏＝戦争を体験していないから平和問題は分からないというが、はたしてそうか。私たちにとってよすがとなる体験は、第二次大戦のそれではなく、私たちが現に今まで体験してきたことのなかにある。この体験を一旦、突き放して見つめ直すためには、互いに語り合うことが重要だ▼下斗米氏＝各国の人々が持っている世界地図はますます違ったものになってきている。国家と個人の間にある社会という視点から、世界の人々を見ること、そして私たちが持っている地図と他国の人々が持っている地図を突き合わせることが大切だ▼高柳氏＝今でも飢餓や戦争で死んでいる人々が第三世界では沢山いる。日々の豊かな暮らしのなかで平和を考えるとはどういうことか。核兵器をなくした暁に、どういう世界が想定できるのか。日米安保を破棄したときにどのような日本が想定されるのか。こうした問いかけをすることなしに、単に脱同盟とか、核廃絶とかいっているだけでは、今の状況に流されていかざるをえないだろう▼鴨氏＝経済的な豊かさのなかで、平和が陳腐化しているが、世界ではまだまだ平和は日常化していないのだという想像力が私たちには足りないのではないか。リアリズムとは知ることであり、考えることであり、行うことだ。だから、そこには何らかの情熱なり、希望なり、理想なりが入ってこざるをえない。平和研究は戦争を制度化しないための切実な思いなのではないか。

米ソの軍備管理・軍縮が暗礁に乗り上げたことによって世界の人々は、引き続き核の恐怖のもとに生きることを強いられている。国家と国家のパワーゲームを乗り越えていく視点は、平和を希求する私たち一人ひとりのなかにあるといえるのではないだろうか。様々な大学から、異なる価値観を持つ学生たちが、寝食を共にし、夜を徹する議論を行うなかで、「真剣に平和を考えている人と出会えたこと」は何にもかえがたい経験となったにちがいない。

（左から）大西，最上両氏

第9回 大学合同セミナー

＝主題＝ 東京の都市景観 その2

期	日
'86.12.12～14	

▼基調講演
都市の音風景
——サウンドスケープとはなにか——
東京芸術大学音楽学部非常勤助手　鳥越けい子氏

▼セクション演習
A　ウォーターフロントと都市景観
——東京計画をきっかけにして——
B　都市と景観
——景観がなぜ注目されるのか——
C　景観は設計しうるか
——コントロールの可能性と建築の独立性——
D　近代都市東京を深層で形作るアジア性
E　造形
——東京タワーをぶっつぶせ——

▼指導教授
芝浦工業大学工学部教授　石黒哲郎氏
早稲田大学理工学部教授　戸沼幸市氏
東京大学工学部助教授　山田　学氏
法政大学工学部助教授　陣内秀信氏
早稲田大学理工学部助手　後藤春彦氏

▼参加者　70名（内女子7名）
芝浦工業（25）、早稲田（23）、東京（11）、法政（7）、東京芸術（3）、立教（1）。

◇

巨大な怪物都市・東京。空から眺めると、無気味なアメーバがジワジワと増殖しながら、次第に市街地へとその触手を伸ばしてゆくかのようである。ビルの上を切れ味のよい刃物で鋭く切ったような線を描く高速道路は、さながらその怪物にエネルギーを供給する動脈である。東京の景観は、一見オモチャ箱をひっくり返したように雑然とした印象を与える。しかし、同時にその無秩序さを基調とする自由自在のネットワークが東京の魅力あるしなやかさを生み出している。

今回の合同セミナーは、昨年に引き続いて「東京の都市景観」を基本テーマに選んだ。前回は、「東京の景観問題は、建築設計や都市計画に携わる者にとって緊急の課題となっている」との問題意識に立ち、新宿、渋谷、池袋など具体的な地域を取り上げ、それらの比較を通して東京の持つ多様な表情を浮き彫りにした。

今回は昨年の議論を下敷きにしながら、「東京の魅力を発掘し、再認識し、今後の町作りに生かしていくため」、また「東京を考えることを通じてアーバン・デザインのあり方と方法論を考えていくため」に、①「土地利用」・「地形、水系」などの物的側面、②「都市活動」・「市民生活」などの非物的側面、さらに③「歴史的パースペクティブをもって、東京の現在と将来を捉える」多重の視点から、東京の景観問題に切り込んだ。

◇

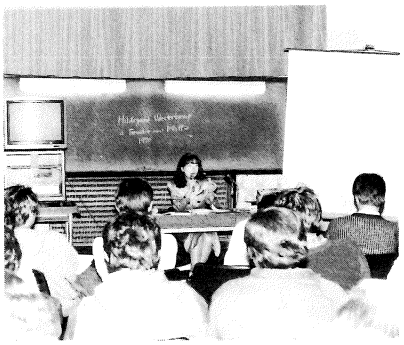
今回のセミナーには、東大の渡辺・山田研究室から新たに一一人の参加者を得て、四大学・四ゼミの学生を中心に合計七〇人の学生が参集した。まずは、この建築系・都市計画学の学生の交流と共同研究の場が順調に発展していることを喜びたい。今回はセミナーの運営方式が、昨年の「教師主導型」から学生の手による「自主運営型」へと移行した。セミナー実現のために、各ゼミから代表幹事を数名ずつ選び、それぞれの希望するテーマを持ち寄って、数回にわたる幹事会の検討を経て、プログラム、演習のテーマ、講演者が決定されるというプロセスがとられた。ここに改めて指導に当られた先生方と、そして各幹事のご努力に対し、厚く感謝の意を表わしておきたい。

◇

初日の基調討論会では、「東京1964・ルネッサンス」他の16ミリフィルムと「NHK首都圏スペシャル・東京を飛ぶ」のVTRが上映され、セミナーは「映像で見る」東京の景観から封切られた。

前者からは、都市を作ること＝ものを作ることで夢を実現できた東京オリンピック時代と様々な都市の矛盾が噴出した現代東京のイメージの違いが、また、後者からは空中から拾った地上とは異なる東京の風景がそれぞれ印象深く映し出された。

「様式のないことが一つの様式になっている」東京の町並みは、さながらあらゆるスタイルを貪欲に呑み込んでゆく日本文化を象徴しているかのようである。「絶えず膨張し、増殖を続ける都市・東京」の背後にあるのは、「人々の都市の中での振舞い方」であり、「東京では、例えば盛り場のように、家庭の機能が外部化している空間が、非常に発達している。東京のスプロール現象を可能にしているのは、人々の振舞い方における flexibility と mobility の高さである」（陣内氏）との視点が示された。



音の世界に魅了されて——サウンドスケープについて語る鳥越けい子氏

◇

「景観」は、われわれの「視覚」に深く関わるものであることは言うまでもないが、これまでデザイン活動においてとかく見逃されがちであった「音」からの切り込みもまた、都市の景観問題に重要な示唆を与えてくれる。セミナーの核を形作る三回にわたるセクション別の演習を経て、二日目の晩には「環境」と「音」の狭間を埋める〈サウンドスケープ〉(soundscape)の考え方を中心に、「都市の音風景」についてのイヴニング・レクチャーが行われた。

サウンドスケープとは、「耳で捉えた景観」=「音の風景」のことであるが、これまでノイズとして片付けられてきた自然の音、都市の音、生活の音などを「音楽」を構成する積極的要素として捉え、言わば「周囲の音環境全体を〈新しいオーケストラ〉としての音楽作品」と位置付け直す考え方である。講義では、サウンドスケープ概念の定義と意義、カナダ・バンクーバーの音環境の分析を通してのサウンドスケープデザインの実践例、都市空間に設置されるサウンドスカルプチャー(音響彫刻)の実例などが紹介され、また鳥越氏自身がモントリオールで集めたいろいろなドアの音のコラージュは、普段は無意識の底に沈められている「音の世界」の楽しさと不思議さで聴衆を魅了することとなった。

また、日本のサウンドスケープの実例としては、現在氏が調査を進めている神田の音風景についての報告がなされ、ニコライ堂の鐘、青果市場のせり声、神田明神の太鼓、救世軍のパレードなど「神田らしい音」が、地域や風土に根付いて独特の「音響共同体」を形成している事実も指摘された。

◇

最終日の全体集会では、各セクションからレポーターが出て、演習の内容を報告し、フロアーからの質疑応答を交えて、活発な討論が行われた。「それぞれのセクションのテーマはユニークで大変面白いものであった」(戸沼氏)が、全体を通じて共通していたのは「感覚的なものを大切にする」(陣内氏)姿勢であった。

今回のセミナーでは、「景観」を「絵ハガキのようなパースペクティブで捉えるのではなく、そういうレベルを超えて、さらに広い意味での景観を考えるところに全体の意志が収斂した」(山田氏)。「意識しないことは対象として存在しない」以上、「景観を意識する」(石黒氏)ためには、外側にある〈眼に見えない風景〉を問題とするだけではなく、われわれの評価したいと思います。各校もち回りで打ち合わせを重ねておりましたし、資料の準備をしているところをしばしば見かけておりますので、彼らがセミナーに至るまでにかなりの時間を割いていたことが分かります。準備した資料の量に較べて、演習時間は短すぎたことでしょう。しかし限られた時間内に、ともかく他人に話せる内容をつくりだすことも重要であると考えれば、時間不足はかえってよかったと思います。それに徹夜は建築系学生にとっては当り前のことですから。

各セクションの総括内容については、具体的に結果を説明できるところまで到達することができませんでしたが、テーマ「景観」の本質を改めて問いなおした結果(あるいは途中)が示されていました。景観は、流行り言葉としてあいまいに語られていますが、それでは先に進めないことを理解できただけでも彼らにとって有益でした。ウォーターフロントのセクションで、「水」がなぜ人を魅きつけるかを考えるに至ったような展開は、大勢による議論ならではの成果であると思います。景観設計の可能性を議論したセクションでは、建築専攻学生と都市計画専攻学生がそれぞれのフリーハンドを手放さないで何ができるかということを議論したようですが、自分の世界の常識が通用しない別世界があることを認識させられただけでも合同セミナーの意義があると思います。

全般的にいえば、景観をつくることは、「音」なども含む全環境をつくることである、という認識に到達できたように思われます。やや身びいきの評価かもしれませんが、如何でしょうか。

参加することによって、私も大いに考える機会を与えられたことに重ねて御礼を申し上げるとともに、皆様のご多幸と、セミナー・ハウスがいつも学生たちの熱気に溢れたところであり続けますようお祈り申し上げます。

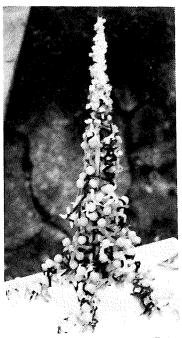
(86年12月21日付企画室長宛の書簡より)

多様な学生、多様な議論

東京大学工学部助教授
山田　学

(前略)　さて先週末のセミナーでは、ひとかたならぬお世話をいただきありがとうございました。セミナー・ハウスについては、ほぼ二〇年前の記憶しかありませんでしたし、それも学生たちとの集まりではありませんでした。したがって今回のような、学生たちとの合宿ははじめての体験ということになります。しかも多様な大学の学生たちと接することができたのも、県人会学生寮での寮生活以来久しぶりのことです。このことだけでもセミナー・ハウス設立の趣旨に感謝しなければなりません。

肝心のセミナーの成果ですが、学生たちだけで企画運営できたという点をまず



Eセクションの作品「東京タワー」の一つ。

心の中に潜む〈内なる風景〉の領域に対しても常に鋭敏であることが要求されている。そうした〈心象風景〉にまで踏み込んでこそ、われわれは「近代化された都市・東京の深層」を形作っている「風土と人間」の問題をより自覚的に捉えてゆくことができるに違いない。

造形のセクションが作り上げた作品「東京タワー」（前掲の写真を参照）には、参加者が感じたままの現代東京のイメージが凝縮されている。そこには、いみじくも「西欧近代とは相反する」（陣内氏）要素が見出されるという。こうした日本人の論理や身体論、感覚論に基づいた次元からの発想もまた、これからの都市の景観問題に重要な示唆を与えてくれるかも知れない。

次回からは、この合同セミナーはハウスのプログラムから独立し、自主的に運営・継続される予定である。これからもセミナーが、さまざまな角度から新鮮な〈都市の読み方・感じ方〉を提供してゆくことを期待したい。

新人類の挑戦
――一幹事の感想――

芝浦工業大学都市計画（石黒）研究室M－
市村　昇

私は建築と都市計画を専門とする以上、「都市」というものを一度、若者の名誉を賭けて柔軟な発想と明快な論理で語り明し、自分の思い入れを込めて世界都市であり、生活の場であるこの集積した場の意味を語り尽したいという思いがあった。セミナーのテーマは「東京の都市景観」であったが、各セクションともこれを避けられなかったようで、われわれの関心がいかに包括的であるか／ありたいかを確認できた。

また今回は、景観を建築と都市計画の用語で話し合おうとは思わなかった。というのは幹事会の中で現実にまだ設計しえない（つまり方法論として把握できない）都市の魅力、その秘密に迫るには視点を変えたり切り口を探すこと、そこから始めなければならない、という意見にしだいに収斂していったからである。じつはそのかげに、石黒先生からの挑発があった。世代を隔てた新人類の感性の欠如を嘆き、一方で今までの研究成果からは東京の景観を把握しえないことを悩んでおられた。幹事はこの挑発に戦いを挑んだのだった。私たちが先生方にぶつけることができる材料は、感性を頼りに東京の景観から受ける印象の体系化と、それに伴う新鮮な切り口だった。発言を建築・都市計画用語に限れば切り口が鈍くなったはずである。

景観というのは、特に専門家でなくても自分のフィルターを通して自然と把握しているので語るべき裾野は広いのだが、都市・建築を学ぶ人の中には景観を専門にしていないということだけで尻込みしてしまう者もいた。景観は、石黒先生が基調論説で書かれているように、今までの方法では分析しえない状況にある。われわれは歴史家ではないし哲学者でもないので、必ずしも東京を語るべき包括的な概念や言語を持たないが、景観はひとそれぞれの思い入れと不可分なのだから（僕はこの機会でこれを確認した）、その人独自の言葉として表わすことはできる。私たちはたとえ素人だとしても、現実にここに生活している主体でもある。その人物が素直に「感じたもの」を言えたなら、それは東京の景観を語る切り口に成り得るのだ。総括の時、各セクションとも、この個人的意味付けをまとめるのにいかに苦労したかが伺えた。

このセミナーの成果は「切り口」をめぐって掌を超えようとする自分に目覚めるというところにあったようである。

春の八花撰
大学セミナー・ハウスの丘に咲く草花から

東京都立立川短期大学教授
吉田　幸弘

春の大学セミナー・ハウスは各大学のオリエンテーションで連日にぎわう。そして美しい花が負けじと咲ききそう。大きな木に咲くあでやかな花は人目をひくが、足もとにひっそりと咲くひかえめな花は「名もない草」と無視されがちである。しかし、「名も知らぬ草」はあっても、「名もない草」はない。もしあったら新種発見である。

せっかくここまで登ってきた新入生諸君、ぜひいくつかの花をおぼえて帰りませんか。そんな気持で春この丘に咲く花をスライドに撮り、私の学校が毎年5月にここで開催している新入生歓迎セミナーの折に映写している。このたび『セミナー・ハウス』紙の表紙作りのご相談を受け、その中から八種を撰んでみた。なお、写真のままでははっきりしていないものは線画に書きなおしてもらった。

＊

カントウタンポポ　世間でタンポポというのはキク科タンポポ属の総称のようである。日本には昔から何種類か野生しているが、最近は外来種にとってかわられようとしている。しかしこの丘にはまだ日本在来の本種が黄色の頭花をつけている。

オオイヌノフグリ　春の野にブルーの小花を敷きつめる本種はゴマノハグサ科の草本。長い鎖国がとかれ、外国との交流が盛んになると、荷物などにまじってヨーロッパやアメリカの植物の種子が日本へ入ってきた。本種もその一つである。

ホトケノザ　春の七草にホトケノザというのがある。現在はタビラコと呼ばれ、田の畦道などに生え、タンポポをずっと小型にしたようなキク科の草本である。しかし現在ホトケノザと呼ばれる本種はこれとはまったく異なり、赤い小さな花をつぎつぎと咲かせるシソ科の小型の草本である。二枚向かいあって茎に付く葉が仏様のすわる座にふさわしいというので名付けられた。

ヒメオドリコソウ　ホトケノザと同属であり、よく似ている。両種を並べてみればすぐ違いがわかるが、別々に見せると間違える人もいる。ホトケノザの葉は下部のものを除き葉柄（葉が茎に付くところにある柄）がないが、本種の葉は葉柄を持っている。

カラスノエンドウ　春の野に密生するマメ科の草本。ピンクのかわいい花をつけ、葉は羽状複葉、そしてその先端の小葉は巻きひげに変態している。

ウシハコベ　春の七草でいうハコベラは現在，ハコベという。ハコベはミドリハコベとコハコベの総称のようであるが、これらよりも大型の本種を含めて三種ともハウス内に見られる。

タマノカンアオイ　カンアオイ属の葉はギフチョウの食草としてよく知られているが、その一種である本種は落ち葉の下から葉片のみを地上に出し、花は落ち葉の中で咲く。

ニワゼキショウ　アヤメ科の小型の草本で、花は白っぽいのとうすいピンクのと二品種ある。小さいのでよく見ないと見のがしてしまいがちである。

私の大学生活とセミナー・ハウス

卒業にあたって

出会いへのプレリュード

東京国際大学教養学部国際学科4年　中江　新

思い出というものは、ある日突然、走馬燈の如く人の心に蘇ってくるものなのか。それとも長い将来にわたって、静かに、しかし着実に心の片隅に住み続けてゆくものなのか。

どのような形であれ、素晴らしい思い出を数多く積み重ねてゆくことによって、人はそれだけ多くのものを学び、いろいろな意味で自分の人生を豊かにすることができる。

さて、前置きが長くなったが、そうした素晴らしい思い出を創ってゆくためには「出会い」が必要である。私にとって、この四年間、大学セミナー・ハウスへ何度か足を運んでみて、いちばん強く印象に残っていることは、まさにこの「出会い」の大切さなのである。

私にとって最初の「出会い」の場となったのが、大学一年生の時の「第10回国際学生セミナー」であった。もともと国際関係の諸問題に漠然とした関心を持っていた（と同時に、自分の大学の雰囲気に慣れ、若干気がゆるんできていた）私は、ふとこのセミナーの広告を見つけると、次の日には申し込みの手続きをしていたのである。さてセミナーに参加してみて驚いたのは、様々な大学からの様々な問題関心を持つ優秀な先輩たち（事実私は一年生だったから、ほとんどが先輩に当たる参加者ばかりであった）がたくさんいて、それはもう対等に議論をする相手であるどころか、ただただ個々の学問内容を拝聴すべき人々であったことである。はっきり言って、最初は怖じ気づいたのだが、同時にきわめて大きな触発を受けることにもなった。

それから四年があっという間に過ぎた。今日まで、国際学生セミナーに連続四回、そして大学共同セミナーに一回、それぞれ顔を出した計算になる。どのセミナーをとってみても、それぞれに有意義な出会いがあった。新しい友人が増えた。自分なりに問題関心となるものが芽生えてきた。それがアカデミックなものであろうと、プラグマティックなものであろうと、知らず知らずのうちに議論に引き込まれてゆく自分に気づいて、はっとしたこともあった。そして最後に多くの夢が思い浮かぶようになった。この次は夢を夢として終わらせることなく、それを実現してゆくことに目標を置きたいものである。

セミナー・ハウスのある多摩の丘を「出会いへのプレリュード」と考えるならば、ここでお世話になった全ての人々に感謝することを忘れてはならないだろう。

思い出の集積地

――「十大共同宣言」を採択して――

慶應義塾大学法学部政治学科4年　門脇　恵一

「どう見ても不安定な建物だな」。大学セミナー・ハウス到着と同時に目のあたりにする本館の印象である。ところが二日、三日と当地で生活し、全日程を終えて帰路に着く頃になるとそれが一変していることに気づく。何かを成し遂げた充実感と心地良い疲労感に包まれて見上げる建物群は、深い緑に映え何と味わい深いことか。機会があればまたここに皆と集いたい、そんな思いにさせる所であった。

私とセミナー・ハウスの出会いは「十大学合同セミナー」の合宿においてである。慶應・一橋・成蹊・上智・津田塾・早稲田・ICU・明治・神奈川・聖心から主に国際政治を専攻する学生が、指導教授の先生方の御縁で集まり、独自のテーマを独自の方法で研究するいわゆる学生主導の団体がそれであった。初期の頃は、大学セミナー・ハウスの主催で七大学合同セミナーから出発したが、四回目からは自立して学生の自主的運営で今日まで引き継がれてきた。「十大学合同セミナー」については、その歴史・規模はもとより組織運営の充実という点においてもおそらく他例のないものと自負しており、また、特に大学の枠を越えた学生同士が真剣かつ自由活発に討論を重ね、互いの視野を広めていく、そうした機会そのものが最近の学生生活ではまさに貴重であるという点で、その存在意義は大きいと思われる。

私は当セミナー第14回の実行委員長を務め組織の運営に当っていたが、数ヵ月に及ぶ活動の最終総括の場としてセミナー・ハウスを使わせていただいた。二〇〇名に達する程の学生が一堂に会し、研究の成果を発表し合うに足る十分な施設と環境を有する場所は当地以外にはなかったであろう。私たちは外界の騒音と誘惑に無縁の天地を得て、心行くまで最後の討論を行うことができた。その結果、当セミナーでも初の試みである「十大共同宣言」を最終総括にかえて作成し、参加者一同の承認と拍手をもって採択することができたのである。スタッフの中にはセミナー・ハウスへの感謝の意味も込めて「八王子宣言」と呼ぶ者もいた。結論に対する考えは様々でも、セミナー・ハウスに来て良かったという思いは皆が

一致していたからに違いない。

討論の場としてだけではなく参加者相互の親睦の場としてもセミナー・ハウスでの体験は貴重であった。自然の中で食住を共にすることがこれ程までに親近感を増すものかと改めて感じさせられた。私たちにとってセミナー・ハウスは、単なる〝場所〟ではなく数々の思い出の〝集積地〟であろうし、今後もそうであって欲しいと願っている。

新入生の軌跡

共同セミナーと「大学生」の発見

日本女子大学家政学部住居学科1年　小林　雅子

夏季休暇に入る前まで、私は大学生活が苦しかった。なんの制約もない解放感は、誰も助けてくれないという不安を作っていた。他校の学生が、我が物顔で校内を歩くのが不思議に思えたし、授業参加が全くの自由ということにとまどった。時間割を組むことにもだいぶ苦労してしまった。選択制に慣れていなかったので、興味のある課目でも、単位を取るのが難しいということが耳に入ると心が揺らいだ。散々迷った挙げ句、先生にまで相談にのっていただいてしまった。今から思うと恥ずかしいことだが、「リラックスして飛び込んでいきなさい」と言われた。

その頃、授業中に第136回大学共同セミナー「文学と風土――日本文学の特殊性と国際性――」の紹介があった。大学生活がしっくりいかず、一日が終ると、どっと疲れるという毎日の気分転換になるかもしれないと思い、参加することにした。ただ一緒に行くはずだった友人が、次々に参加するのをやめたので、私も行かないことにしようかと迷ったが、紹介して下さった先生に励まされ、行くことになった。

私の入ったセクション演習には、先生の話をカードに記入している学生がいて驚いた。彼女は院生で、自分の研究を深めるために、このノートを元に後で興味を持った箇所を調べていくのだそうだ。私は、本当の意味での「大学生」のヒントが、この中に隠されているぞと思い、参加している学生一人一人に目をむけていった。韓国からの二人の留学生もいた。彼らは日本のことを少しでも多く吸収しようと、私達の雑談にも熱心に耳を傾け、発言していた。留学生や院生など、ふだんは接触することがなかなかできない人達と接し、大学がいかに広範囲の人達の学び舎かがわかった。

セミナーに参加してから一年近くたった。やっと軌道に乗り出したこの頃になって、大学というものがつかめてきたと思う。高校までの勉強との一番の違いは、範囲がないことだ。知りたいことは、無限に学ぶ。勉強には終りがないことが少しずつ実感されてきたのは、セミナーで出会った様々な学生からのインスピレーションが大きかったと感じている。

最終合宿と植樹祭

恩師・高野雄一先生の古稀を祝って

上智大学大学院法学研究科　船尾　章子

多摩丘陵の晩秋風景は、上智大学法学部の国際法演習に参加した者にとって、馴染深いものになっている。というのは、演習を指導される高野雄一先生が大学セミナー・ハウスをことのほか御贔屓で、この時期に学部と大学院との合宿演習を行うことが恒例化しているからである。だが、それも今年度でおしまい。高野先生は古稀を迎えられ、この三月で上智大学を去って行かれることになった。

古稀はおめでたいが、別離は惜しまれる。何か記念を残せないだろうか。物はありあまっているが、個人が死蔵してしまえばそれだけのことである。多くの人が利益を分かち合い、しかも、発展を続けるような記念はないものか……。

古稀記念植樹「うめもどき」の横に立つ
高野雄一教授（教師館前庭）

考えた末に、セミナー・ハウスの庭に記念樹を植えることに思い至った。緑陰は人の心に安らぎを与えてくれる。実のなる木なら野鳥の餌にもなる。春には花が咲き、秋には実を結び、そこに集まってきた昆虫や鳥は、やがて遠くのどこかに種子を落とすだろう。こうして、新たな生命を育てつつ、静かにひろがって行く樹の姿は、優れた学者の業績にも似ているではないか。

植樹計画は大学セミナー・ハウスにもご快諾をいただき、教師館前の一等地を確保することができた。先生を驚かすべく、この計画は極秘裏に進められた。資金面では大学院演習の参加者とOB・OGのご協力を仰いだ。各人が相応の資金と労働力を出しあい、'86年12月3日、植樹祭に漕ぎつけたのである。

それは、先生の上智大学における最後の合宿演習の日であった。朝方にはぐずついていた天気も昼には快方へ向かった。記念樹には可憐な花と赤い実をつけるうめもどきを選んだ。まず、赤いリボンで飾った白いシャベルを手にした先生に先鞭をつけていただき、続いて合宿参加者が苗木のまわりに土を寄せていった。植樹には最適のシーズンとのことである。雨あがりの湿った土は、柔らかく苗木を包んでくれたことだろう。

植樹の後は、交友館で、セミナー・ハウスの心尽くしの紅茶をいただき、先生の古稀を祝うケーキも添えて、和やかなひとときを過ごしたのであった。

第6回記念事業特別委員会

'87年1月20日／於銀行倶楽部

（出席者）川原栄峰、宇野重昭、岡宏子、崎田直次、村山松雄、中川秀恭、立野晴夫
（特別出席）U研究室　松崎義徳
（事務局）帖佐哲郎、清水義久
（順不同　敬称略）

◎議事内容

一、募金の進捗状況について

募金目標額三億五、〇〇〇万円の達成状況は1月15日現在の実績七、三二六万七、〇〇〇円、4月末日見込七、三一〇万円、合計一億四、六三六万七、〇〇〇円である。

円高不況の経済情勢の影響をうけて、将来の見込予想から自己調達資金七、五〇〇万円を除いた二億七、五〇〇万円の目標についても縮小せざるを得ない事情となったこと、したがって、現段階においては募金額一億四、〇〇〇万円、自己資金一億円、特定寄付三、〇〇〇万円を見込み、計約二億七、〇〇〇万円で事業計画の検討を進めることが了承された。

二、国際館の構想について

前項の資金計画にもとづき、国際館の構想については、

1　建設予算＝約二億円（主体工事費一・八億～一・九億円）

2　建設場所＝大学院セミナー館西南方（一福亭の南斜面）

3　収容人員＝約40人

を目処にして、創立以来の設計者であるU研究室に依頼して検討を進めることが了承された。

三、総合排水処理施設について

排水処理施設の方式については、一般的な機械式と土壌浄化法方式との両者について浄化能力、建設経費、維持経費等の面を比較検討中であるが、行政面および地元住民との関係等を考慮して早急に決定する必要のあることが報告され、了承された。

国際館建設のための開館20周年記念募金第三回報告

'87年2月28日現在

申込総額　七、六二三万七、〇〇〇円
（入金済　五、五二八万七、〇〇〇円）

内訳

財界関係	二六件	六、七六五万円
大学	三一件	三八六万円
一般	一九件	七〇万五、〇〇〇円
個人	二三四件	四〇二万二、〇〇〇円

・寄付申込者ご芳名（申込順）

◎財界関係

社団法人生命保険協会殿
株式会社西友殿
社団法人日本損害保険協会殿
東京証券取扱所正会員協会殿
日本製薬団体連合会殿
電気事業連合会殿
ダイセル化学工業株式会社殿
株式会社福武書店殿

◎大学

津田塾大学殿
明治大学殿
成蹊大学殿
東京女子大学殿
立教大学殿
日本大学殿
東京家政大学殿
東京医科大学殿
東京農業大学殿
駒澤大学殿
青山学院大学殿
東京薬科大学殿
早稲田大学殿
順天堂大学殿
中央大学殿
慶應義塾大学殿
法政大学殿
日本女子大学殿
大妻学院殿

◎一般

五〇、〇〇〇円　株式会社文化工房殿
五〇、〇〇〇円　株式会社中村電機工業所殿
五、〇〇〇円　おさひめ幼稚園殿
五〇、〇〇〇円　有限会社オヤマ殿
三〇、〇〇〇円　株式会社多摩設計コンサルタント殿
二〇、〇〇〇円　社団法人日本山岳協会殿
一〇〇、〇〇〇円　日本エディタースクール出版部殿

◎個人

三〇、〇〇〇円　中央大学学長　川添利幸殿
一〇、〇〇〇円　順天堂大学教授　山本武彦殿
一〇、〇〇〇円　東京工業高等専門学校校長　関口利男殿
一〇、〇〇〇円　上智大学教授　鈴木　皇殿
三〇、〇〇〇円　神奈川大学教授　加倉井茂樹殿
一〇、〇〇〇円　武蔵大学教授　今井　淳殿
一〇、〇〇〇円　東京女子大学教授　島美喜子殿
一〇、〇〇〇円　元長野工業高等専門学校教授　鹿島健次郎殿
五〇、〇〇〇円　元日本学術会議会長　伏見康治殿
二〇、〇〇〇円　参議院議員　国際教育交換協議会所長　井上雍雄殿
三〇、〇〇〇円　明治学院大学教授　宮野　彬殿
五、〇〇〇円　国連大学特別顧問　永井道雄殿
一〇、〇〇〇円　元東京工業高等専門学校校長　岡野　澄殿
五、〇〇〇円　明石北高校教諭　福山直美殿
五、〇〇〇円　明治大学教授　藤井耕一殿
二〇、〇〇〇円　早稲田大学教授　中村浩三殿

一〇、〇〇〇円　市立大月短期大学学長　石川正一殿
二〇、〇〇〇円　有限会社アイワテクニカルサービス社長　石川洋二郎殿
三〇、〇〇〇円　帝京大学教授　朱牟田夏雄殿
一〇、〇〇〇円　東京女子大学教授　根岸愛子殿
一〇、〇〇〇円　早稲田大学教授　染谷恭次郎殿
五、〇〇〇円　東北大学教授　柏原啓一殿
二〇、〇〇〇円　中央大学教授　山下幸夫殿
五、〇〇〇円　東京外国語大学教授　簗田長世殿
一〇、〇〇〇円　慶應義塾大学教授　久保亮五殿
一〇、〇〇〇円　茶道・花道教授　矢内喜久子殿
一〇、〇〇〇円　国学院大学教授　横山　実殿
一〇、〇〇〇円　東京都立大学教授　宮野三郎殿
一〇、〇〇〇円　国際基督教大学教授　源　了圓殿
一〇、〇〇〇円　慶應義塾大学教授　稲田　拓殿
五、〇〇〇円　津田塾大学教授　青井和夫殿
五、〇〇〇円　電気通信大学教授　石井正博殿
五、〇〇〇円　麻布高等学校教諭　森　昭彦殿
五、〇〇〇円　立教大学教授　武澤信一殿
三〇、〇〇〇円　立教大学教授　前田　愛殿
一〇、〇〇〇円　日本女子大学学長　青木生子殿
五、〇〇〇円　芝浦工業大学教授　十代田知三殿
二〇、〇〇〇円　三友建設株式会社社長　外池孝雄殿
二〇、〇〇〇円　早稲田大学教授　峰島旭雄殿
五、〇〇〇円　㈱東急百貨店　西田貴子殿
三〇、〇〇〇円　電気通信大学教授　井早康正殿
一〇、〇〇〇円　国際基督教大学教授　青柳清孝殿
五〇、〇〇〇円　文学教育研究者集団殿

千人会

'86年12月～'87年2月

◇現在会員一、五二四名（実会員数）
（通算入会者一、七八三名）

◇新しく会員となられた方々
3名〔第86回報告（申込順）〕

C　会社員　生山　智巳殿
C　日本大学講師　小野　文寛殿
C　城東学院大学講師　碓井　信一殿

◇会費ありがとうございます。
横田澄司、岡惺治、近藤保、神保信一、高村弘毅、大地羊三、谷重雄、矢澤修次郎、杉山吉茂、茂木誠陸、田村光三、内藤正、有山正孝、大谷禎之介、大須賀節雄、宮川松男、来住正三、西田亀久夫、茅伊登子、朝日信夫、築地整、池田貞雄、金台然、清水誠、小西正捷、半谷高久、三浦安子、飯田芳男、池田温、高橋浩爾、城謙輔、岡崎正、沼田滋夫、浜川祥枝、大頭仁、飯田恵、松山正男、福原満洲雄、山下幸夫、塚本利明、佐々木邦彦、岩尾裕純、佐藤豪、三井爲友、鈴木謙三、伊藤文人、平松幸一、合田信子、慶伊富長、上田明子、横沼健雄、瀬川渡、住田友文、三浦永光、清水啓三郎、大内英吾、水野悦子、木村敏美、平木典子、浮田久子、遠藤健治郎、森田信義、佐藤方哉、飛田茂雄、中尾由矩子、沢田精二、竹内啓一、佐藤進、高橋恒郎、上山碩、鈴木皇、師岡孝次、山鹿誠次、大川信明、横山実、川崎正三、後藤聰一、青柳総太郎、天野成光、目黒謙次郎、松沢正夫、箱木眞澄、木村康雄、杉山好、一番ヶ瀬康子、江幡玲子、京藤哲久、深沢実、小菅敏夫、斎藤耕二、大羽滋、川端香男里、森山俊雄、石井明、吉永フミ、増田武男、田中国昭、武藤義夫、徳座晃子、佐藤公子、中富光國、古田勝久、小谷正雄、出居茂、乾崇夫、小野寺嘉孝、武田昌輔、高橋源次、新井明、桑原哲郎、村上泰治、鈴木博、若林貞雄、慶谷壽信、竹林代嘉、高村新一、田中英夫、土橋信男、三戸公、大森東亜、吉川孔敏、木村増三、相原光、吉田光孝、北原文雄、伊藤洋、小野旭、清水畏三、萩原玉味、大西直樹、川喜田愛郎、小山弘志、小林清子、小野文寛、河田敬義、遠藤二郎、石川道夫、佐藤音彦、加倉井茂樹、岩崎代志治、篠崎武、茅野良男、天野正、高橋昭三、中島力、上谷琢之、園田義道、小川洋輔、桜井清彦、玉田啓八、富沢賢治、永積昭、根岸愛子、関口晃、池井優、鏡ヶ江信光、金子ハルオ、松原元一、原増司、松元三郎、武者小路公秀、京極純一、石井正博、藤巻正生、安藤義仁、中利太郎、谷資信、小林望、小俣武夫、山田耕司、柳父圀近、板垣雄三、平岡伊佐武、北村嘉行、平川紀一、伊藤学、山口俊夫、吉田耕作、吉田公保、永島孝、一丸節夫、猪瀬博、岩佐凱実、須賀恭一、遠藤平治、磯野修、寺東寛治、牧野誠一、森昭彦、井原恵治、今井裕之、尾田幸雄、松島千代野、大岡信、伊藤千秋、野澤晨、藤井良治、勢山秀子、中岡二郎、本田和子、新澤雄一、高松正昭、石田孝夫、大野京子、原田敬一、箕輪成男、蓮見音彦、斎藤眞、島美喜子、若山邦紘、崎野滋樹、西田貴子、三神勲、磯直道、寺中良一、矢田俊文、泉敏彦、本間仁、高階秀爾、東　洋、佐藤百世　（敬称略）

◇千人会員からのたより◇

今年も計7泊ほどお世話になりましたでしょうか。貴ハウスは我家に戻るようなホスピタリティで迎えていただけます。来年もよろしくお願いします。なお、この正月はオマーンで迎えます。
立教大学教授　小西正捷

◇

今年は久しぶりでお伺い出来、よろこんで居ります。ご健闘をお祈りいたして居ります。
沼津工業高等専門学校長　慶伊富長

◇

国際館建設の計画が一日も早く実現することを期待しております。
中央大学教授　飛田茂雄

◇

僅かですが千人会費をお送りします。この会費が、人件費などで消えることなく、直接、セミナー・ハウスの活動に役立つことを希望しております。電気通信大学教授　遠藤一郎

◇

昨年四月から現職に就き、私立大学の仕組と慣行に漸く慣れ、自分の本来の作業に戻るところです。セミナー・ハウスの発展をお祈りすること切なるものがあります。
上武大学教授　関口　晃

◇

明一月二九日に古稀となります。また二月一五日には二期五年間の学長の任期を満了いたします。七月には、また本学の新入生セミナーで一年生がうかがうことでしょう。よろしく願います。貴ハウスの御隆盛を謹んで祈り上げます。お茶の水女子大学長　藤巻正生

◇

苦しい会計の中ですが、会費をお送り申し上げます。ニュースを読んで思いを新たにしました。
昭和綜合サービス　山田耕司

◇

BEATLESはまだ30歳代の頃に"When I'm Sixty Four"などという歌を書きましたが、私は文字通り64歳になります。別便で昨年の7月に出版になりました拙著「パソコンBASIC心理学実験」を寄贈致します。
聖心女子大学教授　野澤　晨

寄付金報告

'86年12月～'87年2月

〈教育プログラム資金〉
二七、〇〇〇円　第138回大学共同セミナー参加者殿
一〇、〇〇〇円　第138回大学共同セミナー指導教授（鴨・高柳・大西・下斗米・最上）殿
二〇、一一二円　第9回大学合同セミナー参加者殿

〈一般寄付金〉
六、〇〇〇円　早稲田大学鴨ゼミ殿
一〇、〇〇〇円　順天堂大学第6回新P3クラブセミナー殿

〈植樹〉
梅もどき一株　上智大学高野ゼミ殿

業／務／通／信

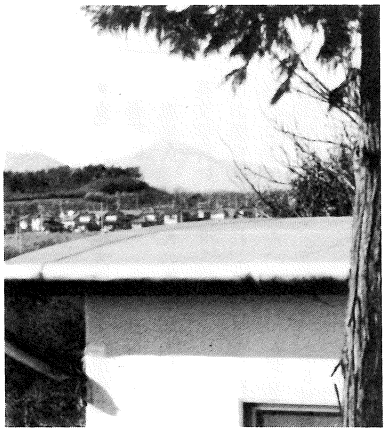
'86年12月、'87年1・2月
年末と新春の合宿・交流から

冬の厳しさの中に、春の訪れが迫る。雪の頃ともなれば、この丘の花の季節はもう近い。12・1・2月には、学年の終りに向けて、厳しい合宿勉強があり、また進学や卒業を前に、師弟間・学生相互間になごやかな交流がある。

●年の瀬・年の始めの来泊者

季節ごとの利用者の再来が、ハウスの一年のサイクルを形づくる。'86年の最後の利用者は12月28日（日）昼食時まで滞在された東京学芸大学英語短期集中合宿、立教大学水口禮治ゼミ、杉野女子大学教育原理ゼミ、文学教育研究者集団の四グループ一〇四名であった。

'87年の初利用は、箱木眞澄・福島大教授。1月5日の夕刻、書類のつまったスーツケースを手にして、にこやかに来館された。四回目の正月利用である。グループでは東京都立大の稲垣寛教授のゼミ（一九名）が一番乗り。今年で16年目の利用である。



厳冬の富士山（第4群宿舎から）

●「厳寒」1月の合宿をお勧めします

1月の利用者が少なくなるのは、試験期間に入る大学の事情で、どうしても避けられない。今年も、1月の延人数は一、一四七人（一六%）にとどまった。正月早々に厳しい寒さとあって、大学関係者ならずとも、敬遠されるからであろう。しかし、この時期の常連の方々は、逆にその〝利点〟を強調される。澄みきった空気、くっきりと美しい富士山、夜空の星。そして何よりも〝シーズン・オフ〟の静かなたたずまい。

東大の高階秀爾教授は、美術史学科の一年の総仕上げの合宿をもう10年も続けてこられた。今回は、学部と大学院の学生二四名と長期セミナー館に宿泊され、学生一人ひとりの研究発表に深夜まで付き合われた。セミナー室にはなごやかな中に、厳しく真剣そのものの雰囲気が充満していた。別掲の『わたしたちの合宿』には高階先生が初春の合宿事始めの利点を綴って下さった。

わたしたちの合宿

一年の総仕上げは新春の合宿で

東京大学文学部教授　高階　秀爾

東大文学部美術史学科の私のゼミが八王子の大学セミナー・ハウスで合宿総仕上げを行うようになって、もう間もなく一〇年である。この間私が外国に滞在していた時期を除いて、毎年必ず八王子でお世話になった。

時期は1月の後半と決めてある。もともと、一年間のゼミの最後の仕上げということでこの時期を選んだのだが、実際にゼミをやってみて、この時期には、いくつかの利点があることを知った。

まず第一に、お天気がよい。これまでのところ、わたしたちの合宿は、いつも好天に恵まれて来た。もちろん、八王子の冬は、都内よりは冷える。時に、日陰の斜面や駐車場の隅に、かたく凍った雪が残っていることもあった。しかし空はいつもよく晴れ上って、時には遠く富士山の姿も望める。熱気のこもったゼミ室での長時間の討論の後で、食堂まで歩いて行く時など、ほてった頬に冷たい空気が快い。朝日に輝いて透明に凍った小道を散策する緊張感も忘れ難い。柴扉暁ニ出ヅレバ霜雪ノ如シというのは、このような気分かと思わせる。

それに、この時期は学年末であるせいか、比較的すいていて、部屋がとり易い。

合宿を終えて――2列目中央が高階教授（本館前）

わたしたちのゼミは、必ずプロジェクターを使うので、それなりの設備が必要である。最近では、セミナー・ハウスの方でも施設の整備をして下さって、大きなゼミ室で二台のプロジェクターを使うこともできるようになった。

ゼミの内容は、一貫して近代美術をテーマとしている。といっても、学生たちの関心にしたがって、その幅は大変広い。一年のゼミの総決算であるので、秋頃から助手や学生と相談して、発表者やテーマを決めて行く。学部と大学院の共通ゼミであるので、初めての学生など、大分緊張しているようだが、何回か続けて行くうちに、自分できちんと資料を揃えて堂々とした発表をするようになる。単に知識を増やすだけでなく、討論を通じて自分の頭を思い切り働かせるところに、真の意味がある。そこでは、時間の限られた教室では見られない昂揚した知的雰囲気が生まれて来るのである。

●女子大・女子短大の三学長が相ついで合宿に参加

恵泉女学園短大の秋田稔学長が今年も英文学科の「国際」セミナー（一六七名）にお顔を見せられ、最終日の全体集会に熱心に参加された。また、杉野女子大の岩澤英一学長は、年末恒例7泊8日の「教育原理ゼミ」に挑戦中の田村皖司教授ら教師・学生五二名を12月25日に激励訪問され、当夜のサンタクロースになられた。また、東京女子大の隅谷三喜男学長は短大二年次のカンファレンスで一泊された。テーマは「想像力と創造力」。卒業をひかえた学生たちは、「何よりもふだん、距離を置いて拝見していた先生方と、一つのことを中心にお話しすることができた」ことを喜んだ。

●恩師へ、感謝をこめて

12月3日、教師館の前庭に、可憐な赤い実をたくさんつけた「梅もどき」が植えられた。高野雄一・上智大教授の古希と退職を記念して国際法演習の大学院生たちが密かに用意したプレゼントであった。思いがけぬ贈物に驚かれた高野先生は、しかし満面に笑みをたたえて、シャベルを手にされた。まことに心温まる師弟交流の情景であった。

高野教授は、国連セミナーと銘打った共同セミナーを三回指導され、その後九年間に一八回ものゼミ合宿をこの丘で実施された。先生の〝お弟子〟〝孫弟子〟の多くがハウスに深いご縁を感じて下さっているのは、そのためである。なお、高野ゼミの船尾章子さんが、植樹祭についてその顛末記（10ページ）を綴って下さったので、ご覧いただきたい。

佐藤豪・慶大教授も今春退職される。数えて17年、毎年12月末に研究室の合宿を続けてこられた。「佐藤研」最後の合宿を終えた同教授は、「しかし、合宿は『川口（修）研』として継続されます」。ここにも師弟のご縁があり、世代を結ぶゼミ活動の継承がある。佐藤先生からのハウスへの最良の贈物でもある。

●一九八七年は特別な年？

新春に寄せられた賀状の中で次のメッセージが目にとまった。「本年は貴ハウスにとって祝うべき年です。なんと一九八七年一月という年代と番地（一九八七ノ一）がピッタリ一致する特別な年です。一月中に是非お祝いを」。一月最後の日、在泊者にこのことをご披露し、食後のコーヒーを供して喜んでいただいた。

●交歓会―夕食時に宿泊グループが交流

12月と1月には合計13回の交歓会を行った。スピーチをして下さったのは、高野雄一（上智大学教授）、中島正樹（三菱総合研究所相談役）、師岡孝次（東海大学教授）、小和田恒（外務省官房長・東大講師）の四氏。

また、慶応義塾大学のワグネル・ソサィエティ男性合唱団は堂々のコーラスを披露し、万雷の拍手を受けた。

大いに語った〈思い出の吉阪隆正〉

――七回忌の集い――

U研究室　三宅　豊彦

大学セミナー・ハウスの設計者である吉阪隆正の〝七回忌・吉阪隆正を語る会〟が昨年12月21日セミナー・ハウス講堂で行われた。ガンとの闘病わずか三ヵ月、疾風怒濤のような吉阪隆正の死は多くの人々に衝撃をあたえた。七年という時の経過の中で吉阪を師とし、友とした人々の心の中に吉阪はどのように生き続けているのだろうか、吉阪が愛したセミナー・ハウスで大いに語ろうではないかというのが会の趣旨だ。前日からセミナー・ハウスで一泊し、吉阪夫人を囲みながら、食事をしながら、フロに入りながら、酒を飲みながらの、のんびりながら族三〇名を含めて出席者は一四〇名であった。

プログラムは、前半に講演、後半に座談会が組まれた。早稲田大学理工学部建築学科吉阪研究室から全国の大学に赴任していった吉阪の数多くの弟子の中から、まず最初に、金沢大学の地井昭夫さんが、学者吉阪が研究しつづけた有形学を如何に継承発展させるかを熱っぽく語り、その決意をここに表明しますと結んだ。次に、早稲田大学の教授である田中弥寿雄氏が、吉阪のほとんどの設計の構造計画をこなしたことから、吉阪の思い出をユーモアをまじえて、たんたんと語った。三番目に、吉阪を主とするU研究室から巣立っていった象設計集団の富田玲子さんが、吉阪は20世紀は西欧思想による価値基準では問題は解決できなくなる時代だとして、不連続の統一体といったことを終生言っていたが、それを建築でどのように具現しようとしているかを具体的に語った。

座談会――左から鈴木恂，大竹十一，吉阪昭次，樋口裕康，安東勝男の諸氏。

座談会では幼少の頃、学生の頃、大学の助教授の頃の吉阪が5人の人々によって語られた。会場の奥様からは吉阪との出会いの秘話もとび出して全員おのろけにあてられてしまった。交友館に移っての酒宴にはセミナー・ハウスの多大なる協力もあって、豊かに時を過ごすことができた。暮のおしつまった日曜日の午後を一四〇名心ゆくまで吉阪を語り、それぞれが思い出を新たにした一日であった。

利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
日帰りを除く

■12月（92グループ、延三、六六三人）

日本大学教授　瀬在　良男
東京電機大学教授　八木沢壮一
中央大学教授　池庄司敬信
淑徳大学社会福祉学科長谷川、千徳、金子、米川、田中、許斐、下山合同ゼミ
上智大学教授　高野　雄一
国際基督教大学教授　都留　春夫
中央大学教授　早川　広中
中央大学助教授　関口　定一
東京都立大学教授　高田　清朗
東京都立大学教授　坂元　忠芳
東京都立大学教授　佐々木隆爾
明治大学教授　長尾　史郎
早稲田大学教授　鴨　武彦
中央大学講師　多田　実
中央大学教授　竹村　孝雄
東京都立大学教授　伊藤　文人

合宿を打ち上げて――幹事を胴上げする横浜商科大・平野ゼミナール（本館前広場）

中央大学助教授　斉藤　叫
青山学院大学教授　佐藤　和男
東京大学教授　坂部　恵
電気通信大学教授　荻原洋太郎
慶應義塾大学教授　小池　生夫
日本大学講師　中西　裕一
明星大学教授　小川　哲生
早稲田大学教授　川原　栄峰
早稲田大学教授＊　大畑　弥七
東京都立大学教授　長浜　邦雄
早稲田大学教授　平澤　茂一
早稲田大学教授　染谷恭次郎
早稲田大学教授　村上アブタン
早稲田大学絵画会
東京女子大学教授　根岸　愛子
芝浦工業大学教授　十代田知三
恵泉女学園短期大学英文学科総合講座「国際」セミナー
東京大学教授　菊地　昌典
東京外国語大学助教授　島薗　進
東京都立大学講師　山川　仁
東京都立大学助教授　日向野幹也
東京都立大学教授　山住　正己
明治大学講師　山野　康美
東京経済大学教授　古川　純
東京経済大学教授　石丸　晶子
東京理科大学教授　狩野　紀昭
工学院大学助教授　吉田　倬郎
芝浦工業大学助教授　藤澤　好一
東京都立大学教授　飛田　満彦
東京外国語大学教授　原　誠
早稲田大学教授　大頭　仁
慶應義塾大学助教授　田村　俊作
慶應義塾大学教授　佐藤　豪
法政大学中国語研究会
慶應義塾大学霞会
杏林大学助教授　千葉　洋
東京学芸大学KITCセミナー
杉野女子大学教授　田村　皖司
立教大学教授　水口　禮治
国士舘大学意匠ゼミナール
東京国際大学教授　名東　孝二
横浜商科大学教授　平野　文彦
和光大学教授　安永　寿延
日本女子体育短期大学常田・二階堂ゼミ
東京女子大学短期大学部2年次カンファレンス
立正大学教授　厚東　偉介
東京芸術大学助教授　小柴はるみ
第138回大学共同セミナー
国際教育交換協議会CJBSP
第9回大学合同セミナー
国際学生シェイクスピア連合
日本国際学生協会
ロールシャッハテスト研究会
東京多摩いのちの電話
ローテックス275
七回忌に吉阪隆正を語る会
文部省科学研究費地域農業研究会
文学教育研究者集団
日野市役所
ウチダコンピュータシステム
ベルモント化粧品
日電物流センター

つきたてのお餅が縁側に並ぶ――年末恒例の餅つき大会（遠来荘）

酒井薬品＊
小西六写真工業
富士電機総合研究所
横河メディカルシステム＊
レストラン西武労働組合＊＊
文化シャッター
（個人利用）
東京農工大学研究生S・オーエン
国際教育交換協議会P・ドナヒュー
明星高校学生　平田　浩士

■1月（40グループ、延一、一四七人）

東京都立大学教授　稲垣　寛
東京都立大学教授　二村　敏子
東京経済大学教授　徳座　晃子
東海大学教授　師岡　孝次
慶應義塾大学助教授　石崎　秀和
早稲田大学講師　松崎　義徳
上智大学助教授　今井　圭子
早稲田大学教授　徳久　球雄
東京理科大学教授　狩野　紀昭
順天堂大学医学部新P3クラスセミナー
東京外国語大学助教授　田島　信元
日本大学教授　高階　秀爾
東京都立大学助教授　伊藤　清和
中央大学夜間部自治会　中本　正智
東京農工大学生活協同組合
東京神学大学第18回教職セミナー
チトクロームP―450研究会
関東甲信越地区高専定期交流会
日本品質管理学会
上智大学カウンセリング研究所
国際交流サービス協会
新日本商会
アイワールド＊
日本電気
日本水産
ホソカワミクロン
伊藤忠エレクトロニクス
酒井薬品
新日本物流
横河エンジニアリングサービス
小西六写真工業
多摩中央信用金庫
日電アネルバ
ドメス平塚
富士電機設計コンサルティング
（個人利用）
福島大学教授　箱木　眞澄
石橋会計事務所　石橋　克朗
駒沢大学助教授　羽鳥　茂

■2月（93グループ、延三、八九〇人）

明治大学教授　福田榮次郎
東京大学講師　小和田　恒
中央大学講師　山本　武利
東京外国語大学助教授　清水　透
東京都立大学助教授　日向野幹也
明治学院大学教授　尾崎　朔
法政大学教授　五味　健吉
中央大学教授　亀山　三郎
中央大学国際関係研究会
青山学院大学教授　西岡　久雄
青山学院大学助教授　笹森　健

明治学院大学人形劇団ZOO　菅沼　憲治
武蔵工業大学体育会リーダースキャンプ　菊地　進
中央大学教授　池田　正孝
東京電機大学学生団体リーダーズ・キャンプ　関口　雅夫
駒沢大学助教授　瀬戸岡　紘　石井　啓雄
明治大学学生保険委員会
慶應義塾大学ワグネル・ソサイェティー男声合唱団　寺中　良二
武蔵工業大学教授　広瀬　鎌二
明治大学教授　牧野　誠一
中央大学経理研究所＊＊　和崎　春日
青山学院大学教授　寺東　寛治
駒沢大学美術部
東京経済大学教授　宮崎　義一
武蔵大学体育連合会リーダースキャンプ　原　正彦
明治大学教授
学習院大学学生相談所
早稲田大学国際学生友好会
成蹊大学教授　高山　一彦
早稲田大学教授　新澤　雄一
東海大学助教授　綾野　克俊
東京都立大学助教授　鳴澤　實
工学院大学助教授　加藤　尚武
東海大学助教授　小中山　彰
東京都立大学助手　山崎　敬一
日本大学講師
立教大学講師
駒沢大学教授
駒沢大学教授
慶應義塾大学霞会
駒沢大学教授
慶應義塾大学英語会
中央大学インナー実行委員会
神奈川大学助教授
女子聖学院短期大学CCF
大正大学就職ゼミ
アジア学院
国立ウィーン音楽大学
全関東学生商業英語連盟
第27回インナー大会実行委員会
中央大学受験生
万国ローアバブテスト福音伝道協会
国際キリスト教青年交換
早稲田奉仕園
都高教七支部青年部
東京都三多摩勤労者山岳連盟
東京サイコドラマ研究会
高橋聖書集会
日本山岳協会
東京松本英語専門学校
多摩中央信用金庫
日本生産性本部
酒井薬品
雪印物産
象設計集団・社会福祉法人ふるさと福祉会
紀ノ国屋＊
中野輸送
文化シャッター
日本電子開発＊＊
久光製薬
小西六写真工業＊
日本郵船
アイワールド＊＊
中央スバル自動車
英國屋
積水化学工業
レブコ
富士電機
東芝府中工場
（個人利用）
東洋大学教授　堀　光男
駒沢大学助教授＊　羽鳥　昭夫
堂計画室　生田　英夫
駒沢大学教授　小林　茂
オージーケー販売　車　源民

●予　告●

●第140回大学共同セミナー

主題　現代社会と思想の地盤変え
――象徴的なものの社会科学――
期日　1987年5月22～24日（金～日）

◇全体講義
永劫回帰とフェティシズム
中央大学文学部教授　丸山圭三郎氏

◇セクション演習
A．〈新しい歴史学〉の可能性――歴史学と社会科学
東京経済大学経済学部助教授　福井憲彦氏
B．消費社会の象徴パワーと文化資本
信州大学教養部助教授　山本哲士氏
C．愛の歴史とル・サンボリック
東京都立大学人文学部助教授　西川直子氏
D．政治的無意識と社会的象徴行為
学習院大学文学部助教授　大橋洋一氏

●第8回大学院共同セミナー

――故山内恭彦先生追悼記念――
主題　現代科学の自然観
期日　1987年7月3日～5日（金～日）

◇主題について
東京大学経済学部教授　竹内　啓氏

◇追悼記念講演
素粒子物理学の現状と将来
東京大学理学部教授　宮沢弘成氏

◇講義と演習
Ⅰ．物理学は世界像をどう変えたか
学習院大学理学部教授　江沢　洋氏
Ⅱ．現代生物学からみる生命
自治医科大学医学部教授　長野　敬氏
Ⅲ．現代天文学からみた宇宙
放送大学教養学部教授　小尾信彌氏

◇演習のディスカッサント
東海大学工学部教授　辻　哲夫氏
東京工業大学工学部教授　吉田夏彦氏

※なお追悼記念会（記念講演及び追悼の集い）が7月4日㈯午後3時半より行われます。

問い合わせ先＝企画室☎0426-76-8532（直通）

○○編集後記○○

キャンバスの桜前線は幸いにも昨春の雪害の影響もなく、いち早く雑木林を彩り、若葉の季節への先導役となりましたが、雑木林が芽吹く頃ともなると、舞台にはもう一方の主役たちが登場してきます。足元に咲いている野の草花たちです。本号の表紙を飾るのは、題して「春の八花撰」。都立立川短大生物学教室の吉田幸弘教授を煩らわせて、所蔵しておられるスライドの中から8枚を選んでいただき、デザインしました。吉田先生による花の説明文（8頁）を併せてご覧下さい。

巻頭の「軍事的研究・開発と科学者」は、次代をになう若人へ、物理学者・豊田利幸先生が語られた平和へのメッセージでありました。先生のお話から感得する科学者の良心は、大学共同セミナーの参加学生たちに大きな感動を与えました。読者の方々にもその感動をお分かちできれば、と思います。

本号も多くの方々からご寄稿いただきました。「私の大学生活とセミナー・ハウス」（9～10頁）には、ハウスでの出会い、学び、別れが綴られています。船尾章子さんの「最終合宿と植樹祭」からは、高野雄一先生のお人柄と学風を慕う弟子や孫弟子たちと先生との温い交流が伝わってきます。9年に亘り18回の合宿を続けてこられた高野先生のお姿が今年からもう見られなくなるのは、なんとしても淋しいことです。

4月10日、六本木の国際文化会館で「吉阪隆正集全十七巻の刊行を祝う会」が催されました。アメリカの大学で教えておられる弟子のお一人が、「日本にもこのような建築家がいるのか」と向こうで大変驚かれた、という話をされました。ライフ・ワークとなったハウスの建築が外国でも評価されているのを知ることは愉快なことでした。全集の刊行により、吉阪学の全貌が明らかになり、地球人・吉阪隆正との対話が可能となったことを喜びたいと思います。（能）

「セミナー・ハウス」一九八七年四月二五日号　発行＝財団法人大学セミナー・ハウス　〒一九二-〇三　東京都八王子市下柚木　☎〇四二六-七六-八五一一　振替口座　東京五-七四五九〇番／編集＝大学セミナー・ハウス企画室／編集・発行人＝中川秀恭／製作＝中央公論事業出版